

綴葉

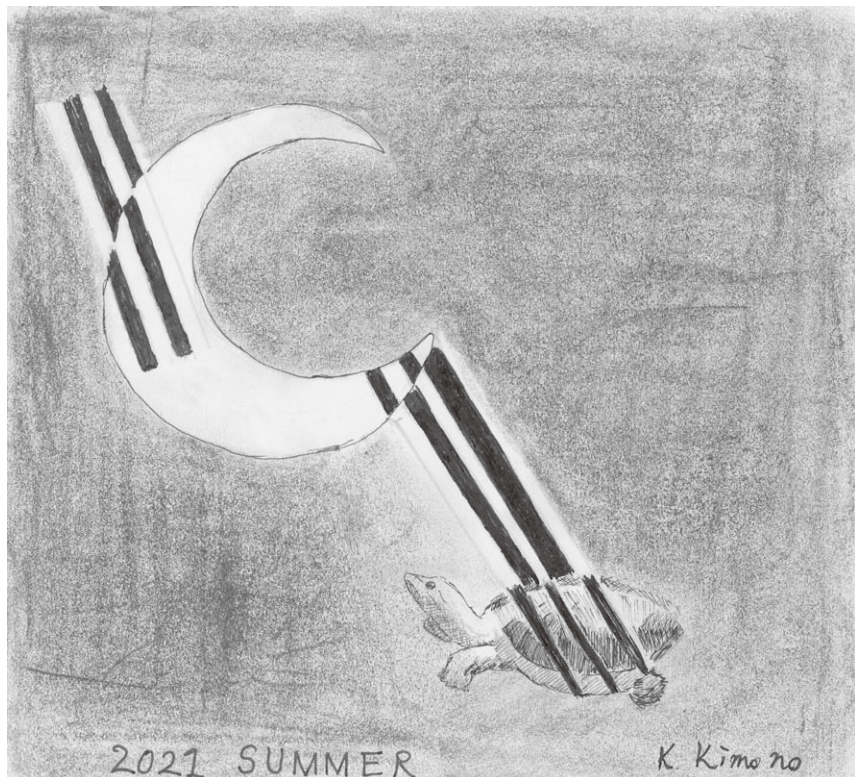
てい
よう

'21

8
9

No.400

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

細見和之、松原薫、川西なを恵著『消えたヤマと在日コリアン 丹波篠山から考える』
フリードリヒ・キッター著、大宮勘一郎・石田雄一訳『書き取りシステム1800・1900』

400号特別企画

特集(1)綴葉のこれまでを振り返る

特集(2)読者からのリクエスト書評

特集(3)ルネからのリクエスト書評／新刊コーナー

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: teiyo@s-coop.net

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikeyo/public_relations/

 **UNIV.** 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

過去を知らないで現在を知ることが出来ない

消えたヤマと 在日コリアン

丹波篠山から考える

細見和之、松原薫、川西なを 著

岩波ブックレット



人は生まれた瞬間に「出生地」を有する。ある者はそこで生涯を終え、ある者は余所へ移って行く。また別の者は余所からそこへ移って来る。畢竟近代以降、「出生地」とは「移動」との力学において考えざるを得ない。加えて当然ながら、ある者にとってそこは「忘れ難き」故郷であり、ある者にとっては「忘れたき」負の記憶の場であることだろう。そして著者の一人である細見が本書で試みたのは故郷の丹波篠山に埋もれた「記憶」を掘り起す作業だった。

細見による第一章「日本の近代と丹波篠山の歩み」には、社会思想史を専門とする彼の慧眼が光る。丹波篠山は兵庫県中東部に位置する人口四万人前後の地方都市であり、週末になれば旧市街にある篠山城跡は観光客の活気に溢れる。だが、細見が注目するのは無論故郷のこうした明るい一面ではない。彼は、この地に住まいながらも郷土史から抹消された「在日コリアン」に光を当てて、彼らの足跡を追うことによって、丹波篠山の近代史を読み解こうとするのだ。

明治末、陸軍歩兵連隊が誘致されると、この地の産業と商業は帝国と共に発展する。大正に入り、戦艦・砲身製造に必須の珪石が発掘されると、鉱山業（ヤマ）も盛んとなった。以降、珪石景気に湧く篠山に次々と労働者が移住するが、それは日本人だけでなく、日

本の植民地支配によって土地も生活基盤も奪われた朝鮮人も多かった。彼らはやがて主要な労働力となったが、他方で当時の新聞を確認すると、「犯罪」を犯しがちな得体の知れない集団として「鮮人」は扱われていたという。細見はこれを、戦争遂行のために労働力という「実体」を奪取しながら、彼らを集団の「鮮人」として「記号」化する、「搾取」の最たるものと指摘する。こうして彼は、丹波篠山が「近代の暴力的な歩み」と軸を二にしていたことを示すのだ。

在日コリアンにとって、戦前・戦中の丹波篠山が「記号」としての存在を強いられる場だったならば、戦後は固有の「実体」を取り戻す場となった。第三章「丹波篠山における在日コリアンの戦後」は、言葉を愛しむ詩人細見が感じられる。戦後、失った民族文化を取戻すため、短期契約で公会堂を借り民族学校が篠山に設置される。だが賃貸期間を越えても学校は立ち退かなかった。後に作成された行政文書の、公民館が「一時期朝鮮人連盟に押収され」という文言に細見は注目する。「賃した」や「占領され」でなく「押収され」という言葉は、日本の朝鮮に対する責任、朝鮮人への眼差し、公会堂の被害者意識を絶妙に表現している。こうした複雑な感情に覆われた歴史にどう向き合うべきか。市民の一人として彼は願っている短い間であれ彼らが学校を設置出来たことを「むしろ誇らしい記憶として捉え返し、次世代に伝えてゆくことができないものか」と。

「移動」を巡る問題は深刻化しつつある。私たちはよく同時代の世界と日本という共時的視座で問題を眺める。だが日本の過去と現在という通時的視座から見えてくるものも多いはずだ。（リンダ）

（八八頁 本体六二〇円 5月刊）

メディア研究と文学研究の新時代を告げた大著

書き取りシステム

1800・1900

フリードリヒ・キットラー 著

大宮勘一郎・石田雄一 訳

インスクリプト



私たちの生活一切は、あらゆる意味でメディアに支配されている。このクリシエの認識により、メディア研究は重要性を増す一方だ。中でも最近注目を集めているのが、本書の著者キットラーである。没後一〇年を目前にして、この革新的なメディア論者の初期代表作の邦訳がついに刊行された。これは画期的な出来事だと言える。

一つのメディアとしてのドイツ文学と、更に幾つものメディア

本書のもととなった論文は、キットラーがドイツのフライブルク大学へ一九八二年に提出したものである。文学研究として審査を受けたこの労作は、従来の文学解釈の枠組みを大きく超えていた。例えば文学作品を言語使用一般の内に含め入れ、その総体を分析しようとする態度。これはフランスの思想家フーコーによる言説分析に倣ったものである。あるいは、そうした言説を読み解く際に用いられる「現実的なもの」「象徴的なもの」という用語。当時は殆どドイツで受容されていなかったラカンの言葉だ。その他多くのフランス思想を参照した晦渋極まりない文章が、当時の先輩研究者の不興を買うこととなる。その結果、若きキットラーは長期にわたり学界の周縁に追いやられていたらしい。

こうした特異な形式で迫られた「書き取りシステム」とは何だ

ったのか。キットラーの定義によれば、その語は「ある所与の文化において、有意義なデータをアドレス指定し送り、記録保存し、処理することを可能ならしめる諸技術と諸制度のネットワーク」を指すという。表現の端々から分る通り、キットラーは情報工学的な発想で「システム」を知ろうとしている。これにより彼は、言説分析とテクノロジー分析を包括した視座を得る。そうすることで、フーコーが見過した「情報技術上の諸革新」が起きた一九〇〇年頃の「言葉と物」を、新たに俯瞰する術を発見したのだ。

文学とメディアの過去、未来のために

人文学における本書のフレイカルな独創性は、ここまで述べた通りである。だが重要なのは、その驚嘆を呼ぶ試みが、同時に網羅的で丹念な古典解釈を基盤としているという点だ。それはキットラーが取り組む一八〇〇年前後、一九〇〇年頃という二つの時代区分からも明らかだ。これらはどちらも、ドイツ文学の大家たちが乱立した類まれな時期なのだから。ゲテ時代と呼ばれる一八〇〇年頃を生きた啓蒙主義者やロマン主義詩人の言説を、その背後から問い倒すキットラー。それが一九〇〇年頃となると、リルケやカフカの文学のみならず、理系諸科学の実験を次々と相手取る。その姿にはテクスト、作者、そして文理を問わぬ諸学への深い理解が伺える。

文学も含め、現代は複数のメディア、複数の情報ネットワークが並存している。キットラーが明かした視座の真価が問われるのはこれからだ。彼が残したこの本を、私たちは理解しようと思えばなるまい。そのために、余りに多く読むことになることも。(とよ)

(八五〇頁 本体八五〇〇円 5月刊)

特集(1)

綴葉のこれまでを振り返る

遂に記念すべき四〇〇号の刊行を迎えた書評誌『綴葉』。しかし今年入ったばかりの新人Bは綴葉の歴史について何も知らなかった。そんなある日京都大学には防空壕があり、その場所では綴葉バックナンバーを収集する熱烈な読者が日夜パイプをふかし、という情報をゲットする。先輩も知らない綴葉の歴史を知るために新人Bは防空壕を探し当てた。そこでは「先生」と呼ばれる一人の古風な男が、不敵な笑みを浮かべて佇んでいた……。

新人B（以下「新」）というわけで、この度は綴葉四〇〇号を記念して、いろいろと情報を教えていただければと思います！

綴葉先生（以下「綴」）：おねね。やっと私の収集が役に立つ時が来ましたね。一緒に綴葉の歴史を見てみましょう。

創刊は一九七五年

綴：綴葉の創刊は一九七五年の一月、今から四六年前だ。当時は月刊誌ではなく、サイズもA4だった。ここに現物があるから見てごらん。

新：うわ！ 全然違う。大学教授も書評しているんですね。



綴：当時は大学の先生に書評を依頼することもあった。新刊ベストセラーなど今はない企画も多い。そして雑誌が綴葉という名前に決まるまでに難航し二ヵ月かかったらしい。

新：最後の頁に「みんなの声の集い」という意味を求めながらも、定着するのは今後の活動次第」とかいてあります。

綴：創刊した彼らも、まさか四〇〇号まで続く老年の書評誌になるとは思っていません。ただ、たぶんね。

九〇年代

綴：しかしその後一〇年間のバックナンバー

は殆ど失われてしまった。国立国会図書館へ所蔵されているが、それも四七号以降だ。今回は九〇年以降をみていこう。

新：当たり前だが綴葉は新刊を扱っているだけあって時代時代の影響を受けている。オウム事件や女子高生コンクリート事件など時のセンセーションを巻き起こした事件が起れば、その本が出てくるんだ。新：現代史を本を通じてみてみるようですね。綴：そんな中九〇年代に特徴的なのはやはり世紀末という空気だろう。特集だけでも「自然科学——その到達点とこれから」「情報化社会」「日本の進路」など未来志向の文章が多い。この頃出たアルビン・トフラーの『パワーシフト』や日経新聞編纂の『2020年からの警鐘——日本が消える』などは今読んでも面白いかもしれないね。

新：確かに今、未来への警告や不安というもの

を具体的に扱う本は少ない気がします。綴：迫りくる二一世紀への期待と不安は綴葉にも表れている。今でもとりあげられる性愛・漫画・詩などおなじみのテーマは勿論あるけどね。綴葉の一つの理念「教養主義」という視点で見た時、時代を通じて変わらない教養と、時代時代に必要とされる教養があるのを見えてくるか

もしれない。

新：「でああ！『教養主義』！難しそう。

でもたしかに創刊号で最初に取り上げられていた九鬼周造『いきの構造』は今でも目にします。しかしこうして見ると殆どの本が絶版してますねえ。

綴：数十年の時を越えられる本というのはあまりないんだ。人との出会いと同じように、本との出会いも一期一会かもしれない。気になった本はその時買わないと、二度と出会えないかもしれない……。

ゼロ年代

新：そして世紀を跨ぐわけですね。

綴：うむ。ただ二一世紀になった瞬間に大きく変わったわけではない。ただ九・一一の影響なのかそのほかの年代と比べて、国や政治について扱っているものが目に付くね。

新：ほんとだ！「ゼロ年代の特集を見ると、『フテンアメリカ』『韓国』『イラク戦争に思う事ごと』『江戸』のように、特定の国や文化について論じているものが多いと見わかりますね。しかしなんだか特集の表現が……。

綴：お、君も気づいたかい。「おこしやす」「おなかすいた……」「ああ 答え教えて！ 安眠の日はいずこ……」これが当

時の特集のお題なんだよ。「おこしやす」では、『泥沼ウォーカー』『愛の空間』が見逃せないね。まさか京都とラブホを結びつけるとは……。

新：こんなにポップなんですね！

綴：「昔は厳しかった」と人は言いがただが、どの昔をとるかで意味が変わる。この時代の綴葉は、もう一つの理念である『学生の身近き』を意識しているのかもしれないね。

新：『学生の身近き』……。えへへ。私も最近綴葉で取り上げられた漫画買っちゃったんですよえー。

綴：（閉口）

表紙の変遷

新：そういえば、漫画で思い出したんですけど、こうして見ると表紙の絵だけでも全然違いますね。

綴：うむ。創刊号で「鶴と太陽」という格式高い表紙だったが、これも時代時代で大きく異なる。さっき見た九〇年代のこれを見たまえ。

新：あれ、ウル●ラマン。あれ、こっちにもウルト●マン。

綴：九〇年代中頃では、このキャラクターが綴葉のマスコミ



トとなり必ず登場していた。翻ってゼロ年代のこれを見たまえ。

新：おお！かわいいうえ、え、これなんて読むの？ あっ、そういうことか。

綴：そう、この頃はイラストだけでなく本の引用文が載せられていた。それは時に中国語だったりフランス語だったりした。新：これはこれで味がありますねえ。でもそうやって考えると二〇年代からの表紙はシンプルですね。

綴：表紙の絵も時代時代の影響を受ける。しかし君たちが振り返っているように、もしかしたらイラストも一周まわって原点回帰をしているのかもしれないね。

一〇年代、現代

綴：よしよし、順調に現代へと近づいてきたな。ここまで来るとだいぶ親しみも湧いてくるね。

新：そうですね、特集のテーマも、少し落着いてきましたね。綴：「電車で読める本」「お休み前に読む本」など、本を読むシチュエーションをテーマにした特集が多いのはこの時代の特徴かもしれないね。一〇年代はスマホの普及と重なるんだ。だからこそ「本を読む時間」というものを明示したのかも



しれない。『オリエント急行の殺人』『深夜特急』などは、電車で読むのにピッタリだろう。

新：言われてみれば電車の中でも、最近はスマホで遊んじゃいますねえ。

綴：遊びといえば、一〇年十一月の特集は「遊び」だ。この巻頭言、読んでごらん。新：なにに、「遊び」といえば『飲む、打つ、買う』……このような典型に回収されない遊び方こそ遊びの本質になったものであるようにも思えてきます。」!?

綴：こんな内容、今は想像もつかないだろう。新：ツッコミどころ満載ですよ！ 急に二〇一〇年を遠く感じました。

綴：一〇年という変化はそれだけ大きい。ここ数年の特集のテーマは「憂本」「手紙」「死」「孤独」。

新：うおおお。暗い。なんだか暗い！ 綴：もちろんそれだけじゃない。しかしこういう変化は本が求められる環境の変化かもしれない。日夜スマホに繋がれ、情報収集が手軽にできる世界で、本に求められる役割とは何だろう。

新：え……。

綴：今の編集委員はそんなことを考えて特集を選んでいる



のかもしれないね。

変わらないもの、変わっていくもの

新：ここまで読んでみて、綴葉も色々変わってきたんだなあと思いますねえ。

綴：もちろん変わらない本もある。新人入号を見れば毎年誰かしらがカントやヘーゲル・アーレントといった思想家を上げているのに気づくはずだよ。

新：出た！ 再び『教養主義』！ 綴：それに吉本ばななや村上春樹なんかも一貫して登場してるだろう。この号を見てごらん。

新：おおおお、若手作家って書いてある！ 綴：今でこそ大御所の作家も、このころは若手だった。そう考えると綴葉は数十年迫いかけて、いつも新刊を紹介している熱

烈な読者といえるのかもしれないね。新：海外の作家はどうですか？

綴：サガンの『悲しみよ、こんにちば』やサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』は定期的に登場する。これは名作だからというのもその通りだが、読者である大学生を強く意識しているのだろう。

新：たしかに三〇年の歴史を見ていても、愛や青春を扱った特集は定期的にやっている気がします。

綴：学生とは常に青春の真ん中を生きている

からね。

新：うん……。

綴：どうしたんだい？

新：最近、何の本扱えばいいかわかんなくて。綴葉の歴史を振り返ればわかると思うんですけど。でも専門書や漫画、絵本に詩何を扱っていいか全然ヒントにならないです。

綴：京大の自由とは常に多様性の中にあるものだから、それでいいんだよ。成功や型に嵌らなくていい。自分が面白いと思った本や、読んでほしいと思った本を書けば綴葉の未来は続いていくはずさ。

新：なるほど！ そういえばさっきの漫画の新刊また買ってなかった！

綴：(おいおい)

◆お話を聞いて

——バックナンバーを俯瞰して綴葉を知ろうとしても一貫した特徴が掴めないくらいバラエティ豊富な本がそろっていました。どの綴葉をとってみても知らない本との出会いがあり、読んでみたくなる書評がありました。最後に綴葉委員が過去の綴葉を振り返る中で、改めて読者に薦めたい本を紹介します。古い手紙を読み解くように、過去の綴葉から届いた本を手にとってみてください。

桃尻娘

橋本治著
ポプラ文庫

橋本治のデビュー作にして一二年続いた長編シリーズの第一部。他人を求めているのに、傷つくのをおそれて表面的な関係に留まる若者達の葛藤は、刊行から四〇年経った今も通ずるものがあるだろう。「人生って、いくらでもやり直しがきくんだよな」。橋本治はきつと今も、失敗をおそれて踏み出せない人々に同じ言葉を投げかけるはずだ。

(四四五頁 本体六八〇円) (きもの)

心のおもむくままに

△新装版△
スザナタマ・ロ著 泉典子訳 草思社

九四年にベストセラーとなり綴葉でも「話題」で扱われた本。孫娘と分かり合えないまま見送った祖母は、その溝を埋めるために手紙を書き始めた。本書は、この手紙という形式で展開していく。そこには母の出生の秘密と顛末、そして祖母の人生が書かれていた。《心の声に耳を傾けること》。簡単なようで難しいこの言葉を、自身の後悔と反省をもとに語り掛けていく。

(二二六頁 本体一四〇〇円) (きもの)

芸術都市の創造

京都とフイレンツェの対話
今道友信ほか著 PHP 研究所

芸術都市として名高い二つの街、京都とフイレンツェ——。本書は両市の姉妹都市提携40周年を記念して開かれた二度のシンポジウムのエッセンスを纏めたものである。その中でも、『源氏物語』への考察が面白い。我々の住む京都という街は、実に様々な顔を持っている。芸術として京都を見たとき、普段と違つこの街の表情を見つけることになる。

(二七四頁 本体一五〇〇円) (出席点)

朗読者

ベルンハルト・シュリンク著
新潮社

ねえ、君は恋したことがあるかい？ 自分の親くらい、大の大人に——。本書の主人公は15歳の男の子。道端で介抱されたことをきっかけに、母親ほどの歳の女性に恋をする。彼女は決まって彼に朗読を頼むのだった……。『坊や』、彼女はいう。『坊や』。彼は人知れず、彼女の秘密に近づこうとするが……。読後、僕は彼に自分を重ねていたことに気づく。なぜ重なるかって？——坊やだからさ。

(二二七頁 本体五五〇円) (出席点)

もつと絶滅するという紙の書物について

ウンベルト・エーコ・ジャンクロード・カリエル著
工藤妙子訳 CCCメディアハウス

脚本家と小説家による、紙の書物をめぐる対談である。その話は太古の記憶術の話へ、イタリヤ映画の議論へ、次々と展開し、両者の紙の書物への想いが伺える。本とは似て非なるものが登場したとしても、本は本のままだ、とウンベルト・エーコは述べている。本書が出版されてから一〇年経った今、果たして「本」のあり方はこの頃と同じだと言えるだろうか。(四七頁 本体二八〇〇円) (茫漢)

絶望の国の幸福な若者たち

古市憲寿著
講談社

「若者」語りはいつの時代も曖昧に、都合よく語られる。社会学者である著者はそんな時代ごとの「若者」の実態を、様々な統計を用いて探ろうとする。

最後に、著者は「日本の若者は幸せだ」と結論づけている。この評価が樂觀的すぎると感じてしまうのは、感染症によって様々な生きづらさが顕在化したこの時代のせいだろうか。

(三〇四頁 本体一八〇〇円) (茫漢)

千年の祈り

イーユン・リー著 篠森ゆりこ訳
新潮 Crest・ブックス

シウバイシーウツンゾウ

中国には「修百世可同舟」という諺がある。これが意味するのは、「誰かと同じ船で川をわたるためには、三百年祈らなくてはならない」ということ。つまり、「どんな関係にも理由がある」ということ。私たちは偶然に出会うのではない。恋人なら三千年、親子なら千年の祈りが、そこにはある。長く深い祈りの末、私たちは出会う。「たがいが会って話すには——長い年月の深い祈りが必ずあったんです。ここにわたしたちがたどり着くためにです」。

全一〇篇からなる本書『千年の祈り』の著者イーユン・リーは、北京生まれの北京育ち。しかし彼女は、中国語ではなく英語で書く。なぜなら、中国語で書くときは自己検閲してしまうから。しかし、母語ではない言語を用いることによって逆に、その文体はまるで冷えた刃物のように、鋭く研ぎ澄まされたものとなっている。飾り気のない淡々とした語り口は、物語全体に漂う悲哀を見事に表現している。とくに印象深いのは、林ばあさんの恋物語を描いた「あまりもの」という短編だ。

林ばあさんはあまりものだ。居場所を見つけたと思っても、すぐにそこから追い出される。誰かに恋をしても、その恋ははかなく碎け散る。学校の家政婦をしているとき、彼女は六歳の男の子に恋をしたが、その恋もやはり実らなかった。「愛の幸せは流星のように飛び去って、愛の痛みはそのあとに続く闇のよう」。だから、孤独な林ばあさんは思う——「この道を行く人は、自分の脚の向かう先がどこなのか、みなわかっているらしい。でも彼らの一員でなくなってから、林ばあさんにはそれがどこかがよくわからない」。

哀しげな美しさに満ちた一冊だ。（ばや）

（254頁 本体 2000円）



特集(2)

読者からの
リクエスト書評

お待たせしました！『綴葉』に挟まれた一枚の紙、「綴葉読者カード」。そこにある「今後取り上げてほしい本」という欄。読者の方はこれまで、ここにたくさん本を書いてくださいました。そこで本企画では、読者の方のリクエストにお応えして、厳選した五冊の本を取り上げます。書棚の前に立ち、自分でじっくりと本を選ぶのも良い。けれど、人から思いがけない本をぽんと手渡されるのもまた楽しい——。私たち編集委員が思いがけず出会った本たちに、読者の皆さまも思いがけず出会ったことになったかもしれません。（ばや）

こころ

夏目漱石著
新潮文庫

そもその話、我々は本当に他者の心を理解して生きているのだろうか。自分の内側にある「常識」と知り得た文脈から、勝手に他者の心を解釈しているに過ぎないのではないか。



夏目漱石の「こころ」は、人の心の理解し得なさを描き出した名作である。先生と呼ばれる人物は学生時代、下宿のお嬢さんに密かに想いを寄せていた。しかしある日、同じ下宿人であり親友でもあるKから、お嬢さんへの恋心を打ち明けられる。先生は思わず「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」と、かつてKに言われたその言葉を、恋の行く手を阻むために言い放つ。その後、先生はお嬢さんと結ばれるのだが、それを知ったKは自室で自殺を遂げてしまうのだった。

教科書にも載っている作品であるため、このあらすじを知っている人も多いだろう。しかし、ここで敢えて問いたい。このあらすじは果たして本当に正しいと言えるのか？

Kの遺書には死ぬ理由が書かれていたが、お嬢さんの名前は一つも書かれていなかった。先生はこれをKが敢えて回避したのだと解釈したが、それは彼が自分の裏切りを知って死んだと思ひ込むが故に生まれる、一つの解釈に過ぎないのだ。そう考えると、Kが先生の裏切りを知る前に、先生の名を呼び眠っているのかと確認してきたあの晩、彼が何をしようとしていたのかということに、なんとも不穏な答えが浮かび上がっては来ないだろうか。

人が抱える想いの不透明さ。それを解釈することしかできない周りの人々。人の心が織りなす悲劇を巧みに表現したこの物語は、やはり普遍性のある文学だと言わざるをえないのだろう。

(ましゅ)

(378頁 本体370円)

まほり

高田大介著
KADOKAWA

リクエストの中で本書を特に推してくださった方が多かったので読ませていただいた。学問の分野がテーマに入った小説を読みたいという声にも応えてくれる内容だ。学生だから今学んでいる分野が小説のテーマに入っていたりすると面白い。自分の知っている専門用語や理論が小説内で展開されているとついついニマニマしながら読んでしまうかもしれない。さて本書で扱われているテーマは……。



本書の主人公は社会学を専攻する大学生。一風変わったモチーフにまつわる怖い体験談、それを調べるために民俗学的フィールド調査を始め、地元の少年の助力を得てモチーフとその源にある社の謎を解いていく。その少年が協力を申し出たのにはあるいわくがあった。そのいわく、彼の幻想のような記憶に登場する少女とその社が繋がった先にあったのは一つの忌まわしい風習だった。そして、実は主人公にも……。

途中に史料の扱いについての膨大な説明と実在の史料も挙げられている。五月号の企画で取り上げた「偽史」とも重なる内容である。併せて読んでみると面白そうだ。

謎を解くことと学問とはどこか似ている。何かに違和感を感じ、その違和感を言語化して問いを立てて解いていく。そこに本書の描き出すような何か「物語」が生まれるかもしれない。そして本書の主人公である大学生にその調査に乗り出した「いわく」があるように、あなたにもきっと今学んでいることを始めた「いわく」があるのでは？ さて、あなたの学んでいることにはどんな「物語」があるのだろう。学問はミステリーだ。その謎をあなた自身で解いてほしい。

(ねこ)

(496頁 本体2100円)

ガザに地下鉄が走る日

岡真理著
みすず書房

ガザとはどこか？ 答えるには、一九四八年「ユダヤ国家」のイスラエル建国のために民族浄化という名目で、パレスチナ人が追放、虐殺された悲劇「ナクバ」から始めねばならない。その悲劇は歴史ではなく、七〇年経った今でも進行形の日常である。ガザは占領を免れ、パレスチナ自治領として存続していた。しかし、二〇〇七年イスラエル軍によってガザが封鎖され、二〇〇万人の住民が監禁されている。

著者は、ガザ地区に留まらず、その他レバノンや難民キャンプで暮らすパレスチナ人について見聞きた出来事を具に描く。その文章には、著者の歩いた土の泥濘や匂いが、そしてパレスチナ人の語る声が、ありのまま届くかのような繊細さと力強さがある。

パレスチナ人の人権を剥奪する中東諸国に無関心な世界に、著者は警鐘を打ち鳴らす。パレスチナ人の彼／彼女たちは、思い出したくもない非情な殺戮についてのインタビューに応じる。「その質問に答える義務があるのよ！」——そう著者に伝えて。そう自分に言い聞かせて。この語りを、我々は知るべきだ。

彼／彼女らが、なりたい職を夢見て大学に進学すること、元の家に帰るために鍵を持ち続けること、家の畑を耕すために種を捨てないこと、故郷の美しさに想いを馳せること——人間として生きる希望を、我々は決して捨てさせてはならない。故郷を見ることなく死にゆく彼／彼女らに、「何が变わるの」とこれ以上世界に絶望し、嗚咽させてはならない。

今、あなたが爆弾を投げられたり、家族が殺されるかもと怯えることのない環境で過ごし、人間らしく生きる権利を希求せず済むのなら、本書を読む義務がある。（トントウ）

（312頁 本体 3200円）



日本近現代建築の歴史

明治維新から現代まで

日埜直彦著 講談社選書メチエ

読者の方から寄せられた、「建築系の本」をぜひ書評してほしいという声にお応えして、近ごろ刊行された建築史の本を紹介したい。表題にもあるとおり本書は、明治維新から戦後、高度経済成長期やバブル期を経て現在に至るまでに日本の建築が歩んできた約150年間を、新たに通史として描き切った快著である。

さて、その歴史を切り取るにあたって本書は、以下の三点に着目する。——すなわち、①単一の出来事による劇的な変化でない、長いタイムスパンの中でゆっくりと進展していった「持続的な変化」を読み取ること。②国家がトップダウンで推し進め、体系的な教育を受けた建築家とその担い手となった「上からの近代化」だけではなく「下からの近代化」、つまり大工をはじめとする市井のひとつとが生活の場で実践していった、ボトムアップ型の近代化にも目を向けること。そして、③明治維新以降、国家の主導性によって建築が〈国家のため〉という重荷を背負わされていた「国家的段階」と、建築を取り巻く状況に国家の存在感が薄れ、そのありかたが拡散した1970年代以降の「ポスト国家的段階」との間にある断層、不連続性を押さえること。

このような歴史観の下で本書が取り上げる事象は、先般、結成百年を記念した回顧展が開催された大正期の分離派建築会や、戦後のメタポリズム運動、磯崎新などその名を挙げ出せばキリがない。ただし本文の構成は、各時代の代表作を単に羅列しただけでも、いたずらに写真や図表を並べただけでもなく、その記述は丁寧にそして行き届いている。建築や近代日本史を専門とする以外の人間にもお薦めできる、充実の一冊である。（八雲）

（424頁 本体 2250円）



これからの男の子たちへ

太田啓子著
大月書店

日本におけるジェンダー平等の理念は、公的にも私的にも蔑ろにされ続けてきた。最近は公人の振舞いや娯楽作品の描写に、分別が求められ始めている。しかし、これからのことはまだ十分に考えられていないのではないか。



来るべき世代に明るい希望を届けたい。そんな印象を与えるタンポポ色の表紙が目印の本書は、しかし男性らしさの暗い部分を主眼に置いている。それは小学生の時からもう現れると、著者の太田は述べている。男子たちを取り巻く「男っぽさ」の固定観念に、彼女の息子たちもまた絶えず晒されてきた。弁護士としても活躍する著者は、カンチョーポーズにはしゃぐ、モテを意識し出すといった子の体験を親目線で語る一方で、そうした様子の延長線上に、犯罪を起こしかねない「有害な男性らしさ」をも見据える。己の二面性を引き受けながら、思考を巡らせ言葉を紡ぐ彼女の姿勢は、誠実そのものであろう。

特に「感情の言語化」を巡る部分に注目してみたい。収録されたインタビューでは、男性の「感情を言語化する能力の低さ」が話題となる。それは女性を嫌悪する非モテ男性や妻の話を聞かない夫の事例に深く関わるというのだ。己の感情への盲目さが他者の心を傷つけるのは想像に難くない。無思慮な言葉は身体的な暴力同様、性に不快な意味を付着させる。だが、言葉も身体も、快や喜びの源泉となり得る。その効用を育むためにも、著者は感情の言語化を勧めるのだ。なるほど本書は、読み応えのあるその実践例でもある。

本書で火が付き更なる書籍を求める読者もいるだろう。そんな時は、生協や各書店が開催する書籍フェアに行ってみよう。（とよ）

（262頁 本体1600円）

特集(3)

ルネからの リクエスト書評

「本を読むということとは、人間社会の重要な特質である。」綴葉創刊号の野村秀和先生（当時経済学部助教授）の言葉です。誰もが自身の人生に影響を受けた一冊の本との出会いの体験があると思います。綴葉が紹介する一冊にはそんな力があるかもしれません。綴葉は四六年間京大生の知的好奇心を刺激してきました。その長い歴史に思いを馳せ、京大生協は「知」を支える存在であり続けるという矜持を胸に抱き、これからも奮闘いたします。

（京都大学生協同組合 専務理事 國見伸行）

学問からの手紙

時代に流されない思考

宮野公樹著 小学館

「これから学問の探求世界へと分け入る若い世代にこそ読んでいただきたい」という、ルネの方からの熱いリクエストに応え、本書を紹介しよう——他でもない、本学の学際融合教育研究推進センターの宮野公樹による学問論である。彼の講義、エッセイそしてインタビューの三つから構成される本書は、彼独自の学問観に貫かれている。

宮野曰く、学問とは「問いに学ぶ」ものである。「なぜ……なのだろうか」あるいは「……とは何か？」といった問いを、この自分が発するのはなぜか。新たに設定されたメタ的な問いかけの中で自分、そして人間という普遍的な存在、さらには答えのない問いに向き合うこと——ここに著者は〈学問〉の本質を見ている。このとき学問は、答えがあらかじめ設定された問題を解くだけの「勉強」でも、まして学術論文という形式に縛られた「研究」でもない。こうして規定された〈学問〉は、同じような意味合いで用いられがちな概念から峻別され、むしろそれらの枠組みとの強いコントラストの中に位置づけられる。

宮野自身も自覚的であるように、本書は決して調査結果やデータに基づく探究でなく、彼が学問に対する一方的な想いを綴った「手紙」にすぎない。章末の注ですら、それはあまりに主観的に書かれており、論理的な文章と言いがたい面は大きい。あるいは宮野なら、それは本当に〈学問〉を想えばこそ、その感覚的な書き方にやむなしと応じられるだろうか。しかし評者はその厳密さの不在に、積極的な議論や対話を遠ざけてしまうような物足りなさを感じずにはいられない。本書を手にとった読者の、批判的な意見を請いたい。(八雲)

(224頁 本体 1400円)



学術書を読む

鈴木哲也著

京都大学学術出版会

「学びたいことを自由に学びたいなあ」。そんなことを考えている人こそ、最初に学術書を手にとるべきかもしれない。

研究者の業績評価の変化に伴い、研究者が書籍よりも論文に集中せざるを得ない現代だからこそ、学術書は「専門を越えたコミュニケーションのメディアとして「二回り、三回り」外に向けて書かれた本」であるべきだと、著者の鈴木哲也は言う。複雑な現代社会の問題と向き合うためには、関連する他分野の理解が必要である。しかし「流動食」のような内容の薄い本を読むだけではあまり効果はない。ある分野の方法論や物の見方を適切にインプットするには、学術書が適しているのだ。

しかし現代の学生にはお金も時間もない。それを著者はよく理解しており、第2部では専門外の学びに有効な本を「①自らの専門からは遠い本②自らの専門に近い本③古典④現代的課題についての本」の4つに分類し、選書法を丁寧に論じている。例えば①のような本を選ぶとき、ある分野に関する「良質の科学史・社会文化史」を扱った本がおすすめだという。そのような本は数が少なく選書しやすい。また、「学問の歴史的な動態を知り、そこで何が問題にされどんな方法で何が解決したのか」を学ぶことができ、「自らの認識論や方法論」を豊かにしてくれる。

本書で具体例として用いられる書籍の分野は人文科学、社会科学、自然科学を横断しており、どのような専門の学生でも興味を持って読めるだろう。専門に閉じた「わかりにくさ」にも安易な「わかりやすさ」にも逃げない、「丁寧な」良書を選書することがこれからの『綴葉』にも必要なのかもしれない。(石透)

(138頁 本体 1500円)



「がんになって良かった」と 言いたい

山口雄也・木内岳志著 徳間書店

彼とは一回生の時ツイッターで繋がり、最期までそれだけの仲だった。知り合いの学生たちが、他愛もない日常のあれこれを書き連ねる一方で、千羽鶴と共にアイコンに映っている彼は、イケてる車と死生観のことをよく呟いていた。



山口雄也。胚細胞腫瘍というがんに侵されて以来、生と死の狭間を長きに渡り歩き続けた京大生。『「がんになって良かった」と言いたい』は、重く苦しい闘病記であると共に、がんを患った彼が眼差していた世界、生きることの意味についての思索、そういったことに触れられる生々しい「生」の記録だ。

以前、タイトルにもある「がんになってよかった」という言葉によって、彼に関するネットニュースは炎上した。「癌になって良いはずがないだろう」「強がりだ」「それは生きているから言えることだ」ところが、あまりにも辛辣な数々のコメントに対して、彼はユーモアを持って「僕はナンを食べてナンのレビューをしただけだ」と一蹴する。彼の魅力は、自分の哲学を持ってものを考え、自分自身を発信し、世界に接続していこうとする、そのバイタリティの高さだ。加えて文才まであるものだから、彼の書くものは途轍もない痛快さが感じられる。

先日、評者はある友人と遊んだ。彼は山口君とドライブに行く仲だったらしい。「彼は高速道路を堂々と飛ばす。やっぱり死を覚悟した男は違う」と冗談を言うものだから、思わず笑ってしまった。そういえば、彼は窃盗犯をとっ捕まえて表彰されたりしたこともある。結局、「死」も彼の人生に起きた出来事の一つに過ぎない。なら、忘れたくない「生」の話をたくさんしようよ。（ましゅ）

（256 頁 本体 1500 円）

日常実践のポイエティーク

ミシェル・ド・セルトー著

山田登世子訳 ちくま学芸文庫

アクチュアルな話題だが、コロナへの対応を巡って社会が揺れている。外出は控えなければ、マスクを付けなければ、午後八時に閉店しなければ。強制される規範に息苦しさを感ずる、押しつぶされそうになっても、生活していかなければ……。そんな苦しみを暫しの間紛らわしてくれるかもしれないのが本書である。



ポイエティーク。難しく聞こえるがギリシア語のポイエイン＝創造という意味の言葉に由来する。実践の創造とは何か？ 実践してみるということだ。では何を実践するのか？ 人間的行為を。個人主義の高まりによって個人は「孤人」となり、社会の流れの中で整列され均されてしまう。ともすれば大勢に順応する個人がいかんして自主性を取り戻せるのか。本書の中で著者は、日常の営みこそが自主性を回復するための有効な手段だと考察する。話す、歩く、書く、読む、身の回りの行為があなたをあなたへ還してくれる。所与の規範に収まりながら日常の行為によってその規範の意味をずらし、作り替えていく。その時、あなたに見える社会の様相が少し変わるかもしれない。社会に対し声を上げて闘うことができるほどの「強さ」はなくとも、隙間をぬって社会の網から抜け出す「強かさ」を身につけることは可能だ。抜け出したらほら、こころで一息ついて？ また生き抜くために。

刊行されたのは四〇年ほど前だが、焦点となっているテーマは現代もなお、いや現代こそ一層切実にわたしたちの心に迫ってくる。

分断され、個別化していく世界で個に囚われてもなお社会に囚われない在り方を模索する人へ。その手元に本書があったほしいと願う。（ねこ）

（560 頁 本体 1700 円）

新刊コーナー

花の子ども

オイズル・アーヴァ・

オウラヴストッティル著

神崎朗子訳 早川書房



「人生にひょっこり現れた人たちは、ずっと前からそばにいた人たちよりも、大きな影響を及ぼすことがある。」

主人公アルンリョウトウルは、庭いじりが好きな二二歳の男の子。高校卒業後、大学にも行かず、将来について考えあぐねている。そんな中、一夜限りの関係だったアンナから子供ができたと告げられる。主人公は、母が遺した珍しい品種のバラを持って異国の地にある世界有数のバラ庭園に向かうも、数カ月後、アンナから勉強に集中したいためしばらく子どもを預かってほしいと頼まれる。

子どもという他者を抱えて生きるとはどういうことだろうか。愛し合ったわけでもない相手との間に、特に望まれて生まれたわけではない子ども——その子の親に「なる」ためにはどうすればいいのか。彼らは親であることに変わりはないが、また親になれない葛藤

を抱える。しかし「花」である子どもによって、全くの他人である二人が世界を交わらせながら家族の形を見つめ直す。

本書は、その人物の会話の自然さ故に、全ての登場人物が活字ごしに話しかけてきそうな程近くに感じられる。良い匂いが漂う美味しそうな食風景、鮮やかな彩りが広がるバラ園の景色等がありありと描写されているのも魅力的だ。主人公の不器用で意気地なしながらも飾らない正直さや、花や子どもに母念に愛情をかける優しさに、人間のいじらしさを感じる。本書は、生きとし生ける者に宛てた素直で美しい恋文である。(トントウ)

(三八四頁 本体二〇〇円 4月刊)

「低度」外国人材
移民焼き畑国家日本

安田峰俊著
KADOKAWA



入管法改正法案の取り下げで話題になったように、近年日本政府による難民への姿勢は社会問題として広まってきている。先進国でもあまりにも低い難民認定率。そして人が死んでしまう程の劣悪な入管収容所。

これと地続きの問題として語られるのが「技能実習生問題」である。移民に頼らざるを得ない日本政府は、技能実習という名目で外国人労働者を受け入れている。しかし実態は技術を学ぶのではなく、安い労働力としてこき使われることを肯定する制度として機能している。

このような「低度」外国人材——この言葉は専門職に代表されるような高度外国人材と対比されている——は主に二通りに語られてきた。一つ目は完全な被害者であり可哀そうな善人という語られ方、もう一つは母国文化を破壊する敵であり、潜在的な犯罪者であり、強制送還の対象とすべきのような悪人とする語られ方だ。著者はこの二つを現場が見えていない意見として切り捨てて。そして実際の労働者が善悪では切り捨てられない人間であることを示すために、インタビュートして彼らの生活と実態を記述する。

見えてくるのは日本という同じ国に住みながら、接点のないことの異様さだ。「お金だけほしい」「労働力だけほしい」という需要と供給の中で、人間は人材になっていく。制度の問題を知る上でも、そして移民に頼らざるを得ない国の課題を知るためにも、そこにある生活の声に耳を傾けてほしい。(きもの)

(二四四頁 本体一八〇〇円 3月刊)

国家とは何か、 或いは人間について 怒りと記憶の憲法学

遠藤比呂通著

勁草書房

日本国憲法前文に

は、「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から

免かれ、平和のうちに生存する権利を有する」という文言がある。本書は、この「平和的生存権」を根幹に据えよと、既存の憲法学に對し異議を申し立てる書である。

著者の見るところ、既存の憲法学に根本的に欠けているのは国家論である。ドイツ国法学の理論を受け継ぎつつ、天皇機関説を抹殺した憲法学においては、国家の構成そのものが問われなくなってしまうというのだ。そう指摘したうえで、著者はナチスを批判してきたドイツの憲法学者や、丸山眞男などの諸理論を援用しつつ、国家にとって最大の問題となる安全保障、民族を神聖化し国家統合へと無意識的に誘ってしまう象徴について理論的に考察する。ヘルマン・ヘラーの「弁証法的国家論」やパウル・ティリッヒの象徴論などに依拠する著者の国家論は、本人の言葉を借りて言えば「非国民」——天皇に服^{まも}らぬ



人々——の声を尊重し、内部対立を積極的に評価する敵対的な憲法学といえよう。

本書の最大の魅力は、その「非国民」の声を重視すべきだという根拠として、著者自身が関わった憲法訴訟や、釜ヶ崎での経験を引き合いに出している点である。著者の紹介する裁判の事例、そしてその背景にある歴史的事実を読みながら評者自身何度目も自らの勉強不足に恥じ入った。今なお追い立てられ続ける人々の生を肯定するためにもどうして

も読んでほしい一冊である。（投稿・昌平）
（二五六頁 本体二七〇〇円 2月刊）

生誕の災厄 新装版

E・M・シオラン 著

出口裕弘訳

紀伊国屋書店

生まれてくること

および産むことを否定する思想、反出生主義。出生を否定す



るこの不穏な思想が興隆するなかで、ある一人の思想家に注目が集まりつつある——異端の思想家にして稀代のベシミスト、E・M・シオランである。彼は何よりも、生誕の事実を嫌悪する。彼にとってそれは、一つの屈辱

であり、災厄なのだ。本書は、そんな二〇世紀を代表する反出生主義者シオランによって書かれた、異色のアフォリズム集である。

シオランの言葉は、あまりにも強く烈しい。その強烈な語り口をじかに感じ取ってもらうためにも、彼の言葉をいくつか引用しよう。

彼は言う——「ただひとつの、本物の不運、それはこの世に生まれ出るという不運だ」。

あるいは、こうも言う——「あらゆる罪を犯した。父親となる罪だけは除いて」。彼にとって「真の悪は、私たちの背後にあり、前にあるのではない」。真に呪詛すべきは、この

世に生まれ出ること、すなわち生誕という出来事なのだ。

また本書には、思わずハッとさせられる警句も、随所に登場する。たとえば、こんな警句がある——「駄目な詩人がいっそう駄目になるのは、詩人の書くもののしか読まぬからである（駄目な哲学者が、哲学者のものしか読まないのと同じことだ）。「……」人は、自分の専門を遠く離れたものに親しまないかぎり、豊饒にはなれない」。これを読むと、評者は思わず、「はい、すみませんでした……」と縮こまってしまふ。

本書に鏤められた言葉のなかに、必ず一つは、唸られるものがあるはずだ。（ばや）

（二三六頁 本体二五〇〇円 6月刊）

編集後記 拡大版

スタートの遅れた 400 号企画ですが、なんと刊行の運びとなりました。各方面の皆さま、ご迷惑をおかけしました。（とよ）

記念すべき 400 号に編集委員として携われたことを嬉しく思います。本誌がこれからも、末長く読み継がれてゆきますように。（八雲）

今回取り上げた本もそうですが、「逢ひ見ての後の心」に狂わんばかりの書籍との邂逅に最近恵まれているようです。（リンダ）

本はたのしい。それを読むことも、買うことも、愛でることも。だからこれからもずっと、本と関わっていこうと思います。（ばや）

本は嫌い。時間取られるし、疲れるし。でも、誰かが悲しんでいるその時に、言葉が出てこないのはもっと嫌なんです。（ましゅ）

あ、そういえば、綴葉先生は実在するの？って話。……さあ、どうなのでしょう？500 号記念でまた会えるかも。（出席点）

本を読み、書評することは^{ふれあ}闘いです。『綴葉』はその闘いを多くの人に観てもらえる貴重な闘い場だと思っています。（石透）

本との付き合い方は人それぞれ。他人が書いた書評を読むと、自分の読書の世界が更新される感じがしてすごく好きです。（茫漠）

綴葉委員の方々は、研究や読書にどん欲に勤しむ「知識の虫」です。そんな博学多識の虫に私もなるべく精進致します。（トントウ）

本が一冊、本が二冊……、寝てはダメです、まだ読みたいの！ 眠気と格闘しながら今日も本を読んでいます。（ねこ）

創刊号の言葉が届いた。40 年以上、ここでは言の葉が綴られている。私の言葉も、未だ見ぬ誰かに届くだろう。あなたの言葉も、きっと誰かのための手紙になるだろう。（きもの）

当てよう！図書カード

記念すべき 400 号も、このページで終わりですね。手に取っていただき、ありがとうございます！『綴葉』に 400 冊もの歴史があると思うと、なんだか感慨深いですね。実は 400 号の表紙は、創刊号をオマージュしたイラストになっているんです。では、記念すべき『綴葉』創刊号の表紙は、何がモチーフになっていたのでしょうか？ 400 号をこまで読んでくれたあなたなら、もう気づいてくれますよね……！

1. 松竹梅
2. 亀と月
3. 富士山
4. 馬と鹿

（出席点）

応募方法≫答えを書いた読者カードを、生協のひこうきポストに投函してください。ウェブサイト (<https://forms.gle/evEcpohdZJZURYN>) からの応募も可能です。正解者の中から抽選で 5 名の方に図書カードを進呈いたします。応募の締め切り日は 9 月 15 日です。

5月号の解答

5 月号の問題「フィンランドの祝日」、学生の日（フィンランド語で何と言うか？）の正解は、2. ヴァップ（Vappu）でした。他国ではメーデーとされる日ですが、フィンランドでは学生が中心のイベントです。シマという微炭酸の飲み物と揚げドーナツをいいたくのが定番です。図書カードの当選者は、よっさんさん、スミレさん、ハードラーさん、（*・*）ちゃん、Sosoちゃんです。おめでとございます。（トントウ）